NO.81

蓬左

HÔSA

桐宇治橋蒔絵書物箪笥
（重要文化財　河内本源氏物語　附属）
17世紀

名古屋市蓬左文庫
HÔSA LIBRARY CITY OF NAGOYA

展示室1・2　徳川美術館（徳川美術館では10月2日（土）より開催）

開府四〇〇年、徳川美術館・蓬左文庫開館七十五周年記念

秋季特別展

尾張徳川家の名宝 ―里帰りの名品を含めて―

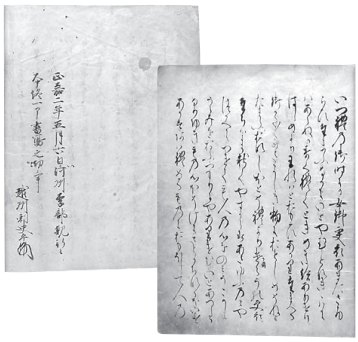
蓬左文庫は、徳川御三家の一つで、その筆頭であった尾張徳川家の旧蔵書を中心に、優れた和漢の古典籍を所蔵する公開文庫です。昭和十年に、東京の徳川家邸内に開館しました。昭和二十五年からは、現在地に移り、名古屋市によって運営されています。徳川家康の遺品として譲られた「駿河御譲本」三千冊を中核として、初代義直が名古屋城二の丸御殿内に創設した〝御文庫〟の蔵書を受け継いでいます。

一方、徳川美術館は、尾張徳川家に伝えられた、いわゆる大名道具を展示公開している美術館で、昭和十年に開館しました。収蔵品は「駿府御分物」と呼ばれる徳川家康の遺品を中核として、歴代藩主や夫人たちの蒐集品、婚礼の際の持参品などで、その数一万数千件にも及んでいます。これらの中には、室町将軍家を始め、織田信長・豊臣秀吉ゆかりの品々も多く含まれています。

本年は、徳川美術館と蓬左文庫が開館して七十五周年を迎えると同時に、徳川家康の九男で尾張徳川家初代となった義直が、名古屋を開府して四百年にもあたります。この記念すべき年にあたり、徳川美術館と蓬左文庫に収蔵される尾張徳川家の名宝に加え、贈与されたり売却された尾張徳川家の旧蔵品が里帰りして、国宝九件・重要文化財四十六件を含む名品・優品を、すべての展示室を用い、これまでにない規模で一挙に公開します。

徳川美術館の新館展示室では、武器武具類や茶の湯道具・能装束・近世初期風俗画などの名品・優品を展示し、つづく蓬左文庫展示室では次のような尾張徳川家伝来の名宝を展示します。まず重文「葉月物語絵巻」や重文「西行物語絵巻」などの絵巻、伝狩野山楽筆「四季花鳥図屏風」や円山応挙筆「鯉亀図風炉先屏風」をはじめとする江戸時代の絵画、重文 陳容筆「龍図」や「琴棋書画図」などの中国絵画、重文 伝藤原行成筆「重之集」や重文「河内本源氏物語」、重文「続日本紀」などの書籍、神仏画や写経などの宗教関係の作品、重文「紫地葵の葉文辻ケ花染羽織」をはじめとする徳川家康所用の染織品、重文「長生殿蒔絵手箱」や「桐鳳凰蒔絵文台・硯箱」などの蒔絵の調度類、「駿河御譲本」や義直の蔵書のうち重文「太平聖恵方」や重文「高麗史節要」「内訓」など中国・朝鮮で出版された書物、尾張徳川家に伝えられた収蔵品のうち世界有数のコレクションとして知られる唐物漆器や唐墨を中心に展示します。

また徳川美術館の本館展示室では、江戸時代に将軍家や朝廷に献上した品や寺社に寄進した什物、明治維新後、尾張徳川家ゆかりの人に譲渡した品々、大正十年（一九二一）に徳川美術館設立の資金捻出のために売立てられた作品や、戦後になって昭和二十三年（一九四八）に売立てられた作品など、かつて尾張徳川家が所蔵していた品々のなかから里帰りの名品・優品を公開（初公開の作品を含む）します。さらに徳川将軍家や阿波徳島の蜂須賀家などの大名家の売立てで購入した作品、名古屋の豪商であった岡谷家や大脇家、高松家をはじめとする篤志家から、近年徳川美術館に寄贈を受けた作品の一端を紹介します。



重要文化財　河内本源氏物語

重要文化財　葉月物語絵巻
第五段　（徳川美術館蔵）

展示室1

開府四〇〇年、徳川美術館・蓬左文庫開館七十五周年記念

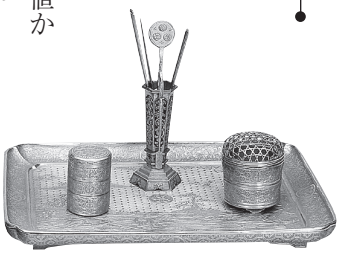
尾張徳川家の金銀調度

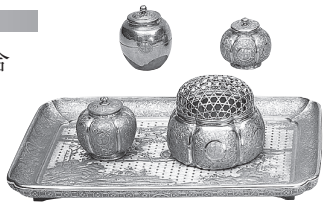
金や銀を用いた工芸品は、近世初期に鉱山開発が進み金銀の産出が増加したことで、多数が製作されました。しかし、これら工芸品の多くは、貴金属としての高い価値から時代を経るうちに鋳つぶされて、消費されてしまい、ほとんどが残されていません。

尾張徳川家二代光友夫人の千代姫は、日本一豪華な婚礼調度「初音の調度」（国宝）を携えてわずか二歳半で嫁入りしました。ほかにも多量の金銀調度類を持参し、その一部が現存しています。この展覧会では、近世大名文化の至宝の一つである千代姫持参の金銀調度を全点公開します。加えて近代に至る、飲食器やさまざまな金銀工芸品をお目にかけます。造形や意匠、技術など奥深い魅力が秘められています。

重要文化財
純金台子皆具　千代姫所用
江戸時代　17 世紀　（徳川美術館蔵）

茶の湯道具の棚である台子（だいす）は、金の薄板を木製の芯に貼り合わせてある。釜（3.1kg）や風呂（7.0kg）は金の無垢である。





重要文化財
純金香盆飾り　千代姫所用
江戸時代　17 世紀　（徳川美術館蔵）

香木をたいて良い香りを楽しむ諸道具。香炉や香合などのほとんどは金の無垢である。盆は木製の芯に金の薄板を貼り合わせており、打刻と線刻によって立体的な風景が見事に描かれている。

展示室2

開府四〇〇年、
徳川美術館・蓬左文庫開館七十五周年記念

源氏物語の世界

蓬左文庫所蔵の重要文化財「河内本源氏物語」、徳川美術館所蔵の国宝「源氏物語絵巻」、いずれも両館を代表する尾張徳川家伝来の名宝です。両館には、これにとどまらず写本や絵画作品の名品・優品はもちろん、「源氏物語」に題材をとった蒔絵調度、茶道具、香道具などの様々な品々が伝来しています。

尾張徳川家にかぎらず、「源氏物語」は、大名道具を彩る代表的なテーマでありました。その代表が、『源氏物語』初音の帖にちなむ意匠をもつ国宝「初音の調度」です。今回は五年ぶりに全七十五件が一挙に公開されます。この機にあわせ、蓬左文庫の展示室では、同家伝来の品々を中心に、大名道具が語る「『源氏物語』の世界」をご紹介します。

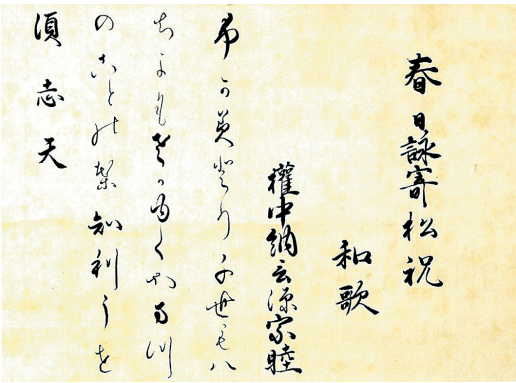
なお、平成二十三年一月四日（火）から二月十三日（日）まで、展示室1の一部に場所を移し、引き続き「源氏物語の世界」を開催します。

展示室1

和歌の姿 ―詠歌の場―

和歌が詠まれ、また発表されたのは、歌合や歌会という場でした。『古今和歌集』をはじめとする勅撰和歌集が編纂された平安時代、宮廷では、歌人が左右に分かれ、和歌の優劣を競う歌合が盛んに催されました。そして詠まれた和歌はまとめられ、歌集となりました。また懐紙や短冊などに和歌をしたためる書式作法が定められ、文学の本質とは異なった部分で発展を遂げました。

詠まれた和歌に作者の推敲や、師の添削の跡を留める詠草、和歌が清書された懐紙や短冊、すぐれた和歌と美しい筆跡を同時に鑑賞する色紙、和歌を集めた歌集や和歌を織り交ぜた物語、遊戯具の一つとなった歌かるたなど、和歌のさまざまな姿を紹介します。また歌会に用いられた文台や硯箱をはじめとする諸道具などを紹介します。



和歌懐紙「寄松祝」　尾張徳川家九代宗睦筆
徳川美術館蔵

和歌懐紙は、自作の和歌を一定の書式で清書した作品。九代宗睦が権中納言であった宝暦11年（1761）から安永10年（1781）までに書かれた。

二十一代集　附　葵紋散蒔絵歌書箪笥
江戸時代　19世紀　徳川美術館蔵

平安時代の延喜5年（905）に成立した『古今和歌集』以降、室町時代の永享11年（1439）に成立した『新続古今和歌集』までの534年間に撰進された21の勅撰和歌集を二十一代集と呼び、後世、和歌の教科書として尊重された。

菊折枝蒔絵文台　江戸時代　19世紀
俊恭院福君（尾張徳川家十一代斉温夫人）所用　徳川美術館蔵

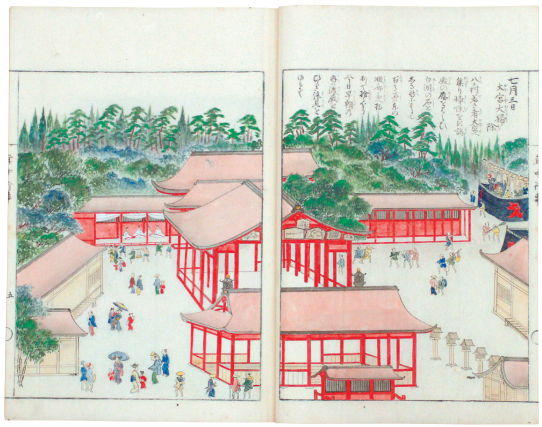
文台は、歌会の際に懐紙や短冊を載せるのに用いられた足の低い机である。

展示室2

尾張の神社 ―新春豆知識―

熱田神宮例祭

勅使を迎えて執行される、熱田神宮の最重要祭典。中央鳥居下に坐す黒い装束の人物が勅使。(2010年6月5日撮影)。



熱田祭奠年中行事図会　10冊

江戸末期の熱田の本殿周辺の様子。現在の姿(明治中期以降の景観)とは雰囲気が全く異る。

現在、愛知県の尾張地域の神社で全国的にも最も有名なのは、名古屋市にある熱田神宮でしょう。熱田神宮は、『古事記』に見えるヤマトタケル伝承でも有名な、皇位のしるしである三種の神器のひとつ、草薙剣を祭ってきた神社です。

しかし神社の格は、その時々の政治権力から受ける支援と深く関係し、転変します。これは皇室ゆかりの神社として現在、伊勢の神宮に次ぐ格をもつ熱田神宮でさえ例外ではありませんでした。「神宮」という、「神社」とは一線を画した特別な呼称も実は、王政復古を掲げた明治政府の意向によって定められたもので、古くは尾張の他の神社同様、熱田「神社」などと呼ばれていました。

熱田神社は、奈良時代初めに編纂された日本初の公式歴史書『日本書紀』に尾張の神社として唯一、その由緒が記された神社です。しかし、平安時代になるまで朝廷から特別の重視はされなかったようで、これについては古代から朝廷の祭祀を司ってきた氏の斎部広成が、九世紀初めに著した『古語拾遺』で嘆いています。

熱田神社が朝廷に厚遇されるようになったのは、そのしばらく後のことです。このころは日本各地の神社の祭神に対して、人間の貴族同様、位階(神階)を贈ることが盛んで、その全国的な序列化の中で、皇室と密接な由緒のある熱田神社の神の位は急上昇し、頂点の正一位を極めました。

このころの尾張各地に他にどのように神社が存在したのかについては、十世紀初めに作られた『延喜式』の神名帳という神社名簿によってその一端が知られます。ここでも熱田神社は、尾張地域において最高の格となったことが知られます。

しかしやがて、平安時代が終わろうとする十二世紀、京都の朝廷権力が衰えるのと並行して、朝廷による序列とは別の、新たな地域独自の格付「一宮」が日本中で流行します。やがて尾張国では、一宮が真清田神社(一宮市)、二宮が大縣神社(犬山市)、熱田神社は三宮、と定まっていきます。

新春を迎え、人々の視線が神社に最も注がれるこの時期、尾張地域の神社のあゆみについての関連資料を、熱田神宮を中心に豆知識を交えながらご紹介します。

展示室1

ひなのせかい

三月三日の桃の節供にちなんで、毎年徳川美術館の本館展示室で開催される「尾張徳川家の雛まつり」展にあわせて、蓬左文庫展示室でもお雛様の展示をします。享保雛や古今雛など、江戸時代から昭和に至るまでの町屋に伝えられた様々なお人形を紹介します。

享保雛

江戸時代の中頃、享保年間（1716 ～ 36）頃に登場したお雛様。頭には髪が植えられ、装束には金襴や錦などが使用され、男雛は束帯風、女雛は天冠を戴き、いわゆる十二単を模した装いがとられている。

古今雛

明和年間（1764 ～ 72）頃に、江戸十軒店（じっけんだな）の人形師原舟月（はらしゅうげつ）がつくり始めたといわれているお雛様。男雛が束帯風、女雛が唐衣裳になぞらえた公家の装束を着用している。

土雛

尾張徳川家十九代の当主で、徳川美術館の創始者徳川義親が蒐集した郷土玩具の一つ。庶民の素朴な土雛。

展示室2

姫たちの絵本

大名家の女性たちの蔵書を代表するものとしては、婚礼調度などにも含まれる装飾性に富んだ豪華な装幀の書物（「調度本」「装飾本」「棚飾り本」）です。

中でも、お伽草子や物語の絵巻や絵本は、金泥で草花などが描かれた料紙に記された詞書（ことばがき）、金銀を惜しげもなく使用した白描や極彩色のさし絵など、平安朝の雅な貴族文化を手本とした華やかな近世大名文化を象徴するもののひとつです。

江戸時代の出版文化の発展は、様々な分野で多くのさし絵本の量産を可能にしました。庶民文芸の世界では、極彩色のさし絵入りの絵草紙が数多く出版され、人気の絵草紙は大名家の奥向きの蔵書にも加えられました。

蓬左文庫にも、奥向きの蔵書と伝えられる新品同様の繊細な色合いを残す『偐紫田舎源氏（にせむらさきいなかげんじ）』が伝来しています。

徒然草　奈良絵本　江戸時代　17世紀　6冊

三代綱誠の正室新君（にいぎみ）（1654 ～ 92）の蔵書。『徒然草』は、吉田兼好の有名な随筆。「奈良絵」とよばれる極彩色のさし絵をともなう豪華な絵本に仕立てられている。

閲覧室だより「レファレンスの窓」

石黒済庵の役宅

―『藩士名寄』にみる屋敷替えの様相―

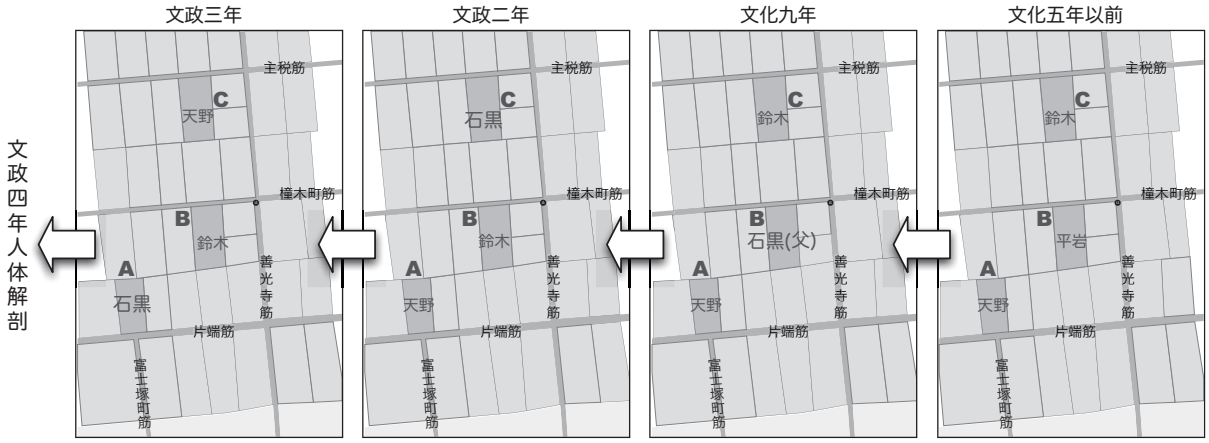
先日、「石黒済庵の役宅はどこか」というご質問があった。石黒済庵家といえば、江戸時代後期、代々尾張藩の藩医として世禄百石を得て、明治維新まで続いた名家である。中でも文政期の石黒済庵は、尾張で初の人体解剖を行ったことで知られている。官医としての初代は石黒通玄で、享保十八年（一七三三）、町医より召し出されて表医師などを務め、天明六年（一七八六）に死亡。二代通仙は養子ながら御側医師・奥医師までのぼりつめ、享和元年（一八〇一）に没する。三代は済庵（通玄【道玄とも】）で、文化十三年（一八一六）に死亡。四代が解剖を手がけた済庵である。人体解剖は文政四年（一八二一）冬、藩の許可を得て新屋敷御様場（おためしば）で行われた。山脇東洋による日本初の腑分けは宝暦四年（一七五四）。有名な前野良沢・杉田玄白による小塚原でのそれが明和八年（一七七一）。それに遅れること約半世紀のことである。この四代済庵は天保七年（一八三六）に死亡。五代魯庵は四年後の天保十一年（一八四〇）に隠居して、養子の済庵（通玄・通仙）に家督を譲る。六代済庵は明治四年（一八七一）に隠居。惣領の真次郎が『藩士名寄』に記録がのこる最後の人物である。

さて、この四代済庵の役宅だが、先ず、幕末の『尾府全図』では「武平町下池田町北へ二軒目西側」にその名が見えるものの、これは六代であり四代の役宅ではない。少しさかのぼって弘化年間の分限帳には、この六代が通玄の名前で、「片端筋杉之町より東へ四軒目北側（宅地Aと略す）」と記されている。つまり、六代通玄は「武平町・・」の前は宅地Aにいたことがわかる。次いで、文政六年頃と比定される『名古屋城下図（名古屋市博物館蔵）』の宅地Aには四代石黒済庵の名前が見える。さらに約二〇年さかのぼって文化五年頃とされる『名古屋城下之図（鶴舞中央図書館蔵）』では、宅地Aは天野多仲とあり、この間に屋敷替えが行われた。本来ならこの宅地Aで決まりである。

しかし、父済庵（通玄）の文化九年の履歴に少々気になる記述を発見した。「居屋敷依願御書院番平岩重右衛門屋敷与相対替」とあり、父は天野多仲とではなく、平岩重右衛門と屋敷替えをしたとある。先の『名古屋城下之図』で当該の平岩を捜すと、宅地Aと同じ街区北側「槿木町辻番より西へ二軒目南側（宅地B）」にその名が見える。つまり済庵は父の代には、宅地Aの三軒ほど背向かいにある、宅地Bに移り住んでいたのだ。さらに文政二年の本人の履歴には「居屋敷仍願寄合組鈴木吉之助屋敷与相対替」とあり、翌三年には「屋敷御用ニ付可差上候　天野勘左衛門屋敷之内三百坪余長屋とも被下置」とあることから屋敷替えが続いたことがわかる。文政の『名古屋城下図』で鈴木吉之助・天野勘左衛門をさがすと、宅地Bに鈴木吉之助が、その一ブロック北の「主税筋善光寺筋より西へ二軒目（宅地C）」に天野勘左衛門（多件改名）が見つかる。つまり、短期間のうちに、宅地BからCへ、CからAへと連続して屋敷替えが行われていたのだ（下図参照）。

文政四年「人体解剖」を画期と考えるならば、済庵の役宅は宅地Aとするのが順当といえよう。ちなみにその場所は、現東片端交差点の一本西側道路北側にあたる。

（調査研究員　松村冬樹）



表紙：桐宇治橋蒔絵書物箪笥（重要文化財　河内本源氏物語　附属）17世紀

「河内本源氏物語」の書物箪笥

表紙中央の写真は、豪華な蒔絵が施された書物箪笥正面の蓋部分であり、下は両側面と背面である。納められていたのは、蓬左文庫の所蔵品のなかで最もよく知られ、また最も貴重な所蔵品のひとつ「河内本源氏物語」である。この蓋をあけると、五四帖各巻の名称が蒔絵で記された四段の引き出しが現れる。

満開の花をつけた桐は、第一帖「桐壺」に因むものであり、背面には最終帖「夢浮橋」に因んで宇治橋が描かれ、天板と側面に描かれた桐、柳、流水が二つを繋いで一続きの図柄として巧みに構成されている。

納められていた「河内本源氏物語」は、現存最古の『源氏物語』の完本である。巻末には、金沢文庫を創設した北条実時（一二三四～七六）の奥書があり、源親行（一一八八？～一二七七？）所蔵の『源氏物語』の書写が正嘉二年（一二五八）に完了したことが記されている。ちなみに源親行が父光行とともに校訂した『源氏物語』の写本を彼らの官名「河内守」から河内本という。

金沢文庫から、足利氏、豊臣氏と権力者の元を転々とした後、徳川家康の蔵書となり、その子尾張徳川家初代義直に与えられた。この名品中の名品を納めるにふさわしく贅を尽くし、十七世紀初頭の最高の技術と美意識をもって製作されたのがこの書物箪笥である。

書物箪笥は、「河内本源氏物語」とともに特別展「尾張徳川家の名宝」で展示される。異例ともいえるほど大判に仕立てられた圧倒的迫力の書物とともに、いずれ勝るとも劣らぬ、風格と豪華さをぜひ実見、実感していただきたい。

重要文化財　河内本源氏物語　23冊　附 桐宇治橋蒔絵書物箪笥
紙本墨書　鎌倉時代　正嘉2年（1258）　写本32×25.5　箪笥39.5×32.5×40.0

蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫　〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地　TEL（052）935-2173　FAX（052）935-2174
ホームページ　http://housa.city.nagoya.jp/〈蔵書検索もできます。〉

交通案内

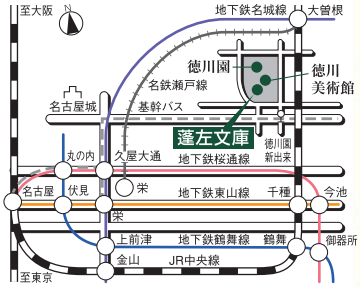
■公共交通機関をご利用の場合

●名古屋駅より（12月下旬ビル建替え工事にともない、バスターミナル内の停留所は、駅周辺道路上の仮設バス停に移動します）

【市バス】名古屋駅バスターミナル（テルミナ2F）グリーンホーム7番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分
【名鉄バス】名鉄バスセンター（メルサ3F）4番のりば基幹バス「引山」方面行「徳川園新出来」下車徒歩3分
【ＪＲ】JR中央本線、「大曽根」下車南出口より徒歩10分
【地下鉄】東山線「藤が丘」方面行、「栄」で名城線「右回り」に乗り換え「大曽根」下車3番出口より徒歩15分　桜通線「野並」方面行、「車道」下車①番出口より徒歩15分
【なごや観光ルートバス「メーグル」】名古屋駅バスターミナル（テルミナ2F）発着で平日1時間に1本、土・日・休日は30分に1本運行

●栄より

【市バス】栄バスターミナル（オアシス21）3番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分



■お車をご利用の場合

蓬左文庫専用駐車場はありません。徳川園駐車場（有料　30分　120円）をご利用下さい。

ご利用案内

■休館日／月曜日（祝日のときは直後の平日）
12月13日（月）～1月3日（月）特別整理、年末年始休館　但し12月28日（火）エントランス・閲覧室開室

■展示室／有料　一般：1200円　高大生：700円　小中生：500円（蓬左文庫・徳川美術館 共通観覧）
【開室時間】午前10時～午後5時（入室は午後4時30分まで）

■閲覧室／無料・館外貸し出しはいたしません。
【閉架図書】午前9時30分～午前12時　12時45分～午後5時　【開架図書】午前9時30分～午後5時
【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。電話・郵便による申込みも可。

「蓬左」第81号　☆平成22年9月30日発行　☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫　☆無料　☆不定期刊行　☆印刷：菱源（株）
※古紙パルプを含む再生紙を使用しています。

nagoya 400th 2010 名古屋開府400年